

# 住み続ける誇りを、これからも 集落支援員と地域おこし協力隊の活動が始まる

3月に、NHKの全国放送で喜茂別町の「集落支援員」の活動が紹介されました。さらに、平成22年度からは「地域おこし協力隊」の取り組みを行うことも放映されました。この報道に対しては全国各地からたくさんの方々が寄せられ、地元でも大きな話題となりました。しかし、この時点では、これらの取り組みについて知っている町民はまだ少なく、様々な疑問の声も聞かれました。

その後、町議会において関連予算案が審議され、事業が正式に決定されました。6月には地域おこし協力隊などのスタッフも決まり、活動が開始されます。

## 1 集落支援員 モデル事業の成果

既に広報で何度か【※1】お伝えしましたが、平成21年の11月から、町内の2地区、伏見・知来別・栄・川上・福島地区(栄モデル集落)と、比羅岡・留産地区(比羅岡モデル集落)において、北海道

の「集落支援員」モデル事業が、NPO法人きもべつWAOによって行われました。3月まで行われたこの事業の成果が、「地域おこし協力隊」事業導入の背景となつていきます。「集落支援員」モデル事業の成果を、『報告書』【※2】と事業参加者【※3】の声をもとにまとめてみました。

## 集落の衰退傾向が 確認された

モデル事業が行われた2地区で、2名の集落支援員が地区の世帯のほぼ全てを戸別訪問し、世帯と地区の実態と意識を聞き取り調査しました。その結果、高齢化による地区活動の衰退は想像以上に深刻であることが判明しました。例えば、世帯主の年齢別の分布を見ると【※4】、現在65歳未満の世帯主は、栄モデル集落では19名(40.4%)、比羅岡モデル集落では12名(54.5%)ですが、10年後の65歳未満の世帯主は、栄モデル集落では3名(6.4%)、比羅岡モデル集落では4名(18.2%)になります。世帯の高齢化は、人口の高齢化【※5】よりさらに深刻な状況です。

『報告書』は、高齢化の深刻な影響を、次のように伝えています。

す。

① 現役の農家が減り、農地の存続が危ぶまれている

後継者のいない高齢化した農家は、農地を近隣などの農家に貸していますが、借りの農家も高齢化しており、将来は農地の存続も不安視されています。既に一部の農地は、耕作者がいない不耕作地と化しています。

② 農作業の協力や助け合いが少なくなっている

農家ごとに農業機械の導入が進み、以前は日常的に行われた手間換えなど農作業の協力が、ほとんど見られなくなりました。機械化が進んでも人手が必要な作業はありますが、市街地からの「出戻り」や家族ぐるみの作業によって個々に対応しています。

③ 葬祭などを地区が自力で担うことが困難になりつつある

## 地域おこし協力隊事業への期待

集落支援員事業の成果と課題について、このモデル事業全体を推進してきた総括支援員の山本浩一さんと日下博文さんにお聞きしました。

「このモデル事業は2つの集落を対象に行いましたが、今日の集落の実態は、明日の喜茂別全体の姿だと実感しました。高齢化や後継者不足によって地域社会がどんな影響を受けるか、これは

葬儀の際は集落の全員が協力し合っても人手が足らず、農協や役場の職員も協力していますが、人手の足りない葬儀施設に任せるしかないのでは、という切実な意見も聞かれます。

④ 通院や買物の交通手段が不便  
路線バスの便数が少なく不便で、患者輸送バスも通院のみしか使えないことから、マイカーのない高齢者は、近所の車に乗り合わせて出かけます。しかし、高齢者は遠慮しないで出掛けられる循環バスやデマンドバスの実現を強く望んでいます。自分の力で集落に住み続けたいという気持ちが強いため、交通手段が確保できない

⑤ 除雪や屋根の雪下ろしが大変  
大型の農業機械を駆使し除雪を行う高齢者もいますが、機械を持たない高齢者世帯では、除雪作業に苦勞します。特に屋根の雪下ろしは困難で、納屋などは雪でつぶれても仕方がないと諦めるなど、住み続ける上での深刻な障害となつていきます。

## 集落維持活動に 意欲的な高齢者

各戸聞き取り調査の後で、集落ごとにみんなで集まり、話し合いを行いました。地区での常会やまちづくり懇談会とは違う自由闊達な話し合いが真剣に行われ、今後このような場が欲しい

という声もありました。また、集落の課題解決のためには若い人材が不可欠という意見について、平成22年度から「地域おこし協力隊」事業の導入を検討しているとの説明を行ったところ、強い関心が寄せられました。集落支援員のひとり宮本弘夫さんは、特に栄地区の話し合いから強い印象を受けたと言います。

「伏見地区などのようにまだ現役の農家が多い地区と違い、栄地区は農家も少なく高齢化率が極めて高いので、前向きの話になるのだろうか」と不安に思っていました。でも、高齢者であつても自分が出ることは自分でするのももちろんのこと、地元住民のノウハウで新たな事業も起こして、地域おこし協力隊には新しいアイデアを出してもらおうなどサポートに廻ってもらいたいという意見が出て、話し合いがとても盛り上がりました。確かに、地域おこし協力隊に頼りすぎると、お互いが良い関係になれないし、若い人の定着も難しいでしょうね。このような話し合いが出来る地域に、心強い未来を感じました。」



患者輸送バス



伏見地区での話し合い



栄地区での話し合い

【※1】「広報きもべつ」/平成21年11月号、平成22年1月号、2月号、4月号、5月号に掲載しています。

【※2】「北海道集落支援員活用モデル事業報告書」/平成22年3月31日発行/特定非営利活動法人きもべつWAO

【※3】集落支援員活用モデル事業が行われた、2モデル集落(4地区)の地域住民の方々(戸別の面談聞き取り調査と、地区ごとの話し合いに参加された住民のみなさん)

【※4】各地区の全世帯のうち数戸については、様々な事情により聞き取り調査ができませんでした。実際に調査の対象となった世帯をもとに、計算値を記載しています。

【※5】人口の高齢化率は、調査時点現在で、栄モデル集落で40.7%、比羅岡モデル集落で43.9%。10年後の推計では、栄モデル集落で63.6%、比羅岡モデル集落で71.2%。